

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（七）-第三編その
1-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22051

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻(七)―第三編その1―

神田正行

凡例(摘録。詳細は本誌五三九号(平成31年)掲載の、本稿(一)参照)

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除いて省略した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落・章段を設けた。話題が改まる位置に、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。
- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書ことばがきは同じ頁の下段に翻字した。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本(133956。改装本)である。虫損や着色、シミなどが目立たぬよう、画像には最低限の修正を施した。

(七)

稗史の荒唐、風を追ひ影を捕へ、泡を掴み屁を握る、報ひによつて臭名の、世に流るゝは素より論なし。然れども作者の用心、亦見るべきものなきにあらず。便はその學術に、浅深あり黑白あり。譬は古人の名に嫁して、一部の小説、一種曲の、伝奇院本を作出すに、善人を誣て悪人とせず、又奸賊を忠義士とせず。これを作者の用心とす。その善人を誣てもて、奸党と做せしものは、『手習鑑』の希世是なり。又奸賊を作更て、忠臣義士とせしものは、『水滸伝』なる宋公明、『阿波鳴門』の十郎兵衛、『白石噺』の常悦是なり。そが中に、小悪を新にして、良善と做すは猶可なり。善人なりしを作更て、悪人と做すものは、非如その文佳妙といふとも、吾が甘ぜざる所なり。抑這『漢楚賽』は、嚮に二二の編輯より、義仲をもて項羽に擬したり。かくて演義の趣に、做ひつゝ、編もてゆくに、彼項羽が江中に、義帝を弑する段に至て、毫を含て以謂、木曾が信濃の宮を立しは、項羽が義帝を立けるに似たり。しかるに義仲は、初を推し

義に仗て、宮を帝位に即まつらん、と思ひしことの久しかりしを、上皇その議に従ひ給はず、且佞臣知康等、群小僉その功を媚みて、讒言市虎をなし、かば、義仲大く憤激して、遂に悖逆の罪を得たり。さるを漢楚の趣もて、義仲宮を弑すと作らば、是それはじめの忠義を誣て、虎狼野心と做すもの也。因て江中の一条は、項羽が子嬰を誅したる、その事をのみ撮合して、彼弑逆の事を取らず。用心音これのみならず、局に莅て彼書の隨に、綴做しがたきこと多くあり。あれども童蒙何をか知らん。いふも腐なる管をもて、天を闢ふ小家の珍説、これでなければ売れずといふ、書肆の責は塞げども、切張もせぬ障子の引幕、第三編の序びらきに、地鉄を著す一片心、戲謔も思ひに出れども、礎てゐては間にあはぬ、隙ゆく駒に後れじとて、今茲も筆を走らす、足より達者な拳の一得、なほ幾の春毎に、長物語続出すべし。

文政十三年庚寅春正月吉日新版

曲亭馬琴識印(乾坤一卍亭図)

《二丁裏・二丁表》



擬楚義帝 信濃宮今屋主
員外 佐貫介重秀妻 磯鳥

▼「竹の園生」は皇族のことで、信濃宮を指す。

擬楚大将英布 源十郎行家
元龍の悔夕ぐれの雲雀かな
▼「元龍有悔」は、「易経」乾卦の語。

《三丁裏・四丁表》



擬曲逆侯陳平 秩父庄司二重忠
 人に貸す師走いそがし智恵囊 〔印〕〔狂〕〔印〕〔京〕

擬漢大將曹參 三善善信
 見る人の楚盤にせまし涼台 〔印〕〔雷〕〔印〕〔水〕

◆長瀬義定、頼朝の陣に来たる

されば又木曾義仲【項羽】は、兵庫の関をうち越えて、福原の都に赴き、鴻の水門【鴻門】に屯しつ、その勢に、三十万騎の、人馬の足を休めけり。

か、りし程に頼朝【劉邦】の陣中より、内股幸弥二道【曹無傷】といふ者、密書をもて、「佐殿先に、福原を攻め取りて、平家を遠く討ち走らし、民に三箇条の法度を定めて、武家の棟梁たらんと欲す。某東軍に従ふといへ共、君の武徳を慕ふこと久し。よりて秘かに使ひをもて、これらの由を告げまゐらする。御用心あるべし」とぞ書いたりける。義仲はその密書を、覚明【范增】に読ましつ、聞も終はらず気色変はりて、「そは安からぬことにこそあれ。今より葉上【霸王】へ押し寄せて、頼朝を討ち取るべし。用意をせよ」と息巻きしを、太夫坊覚明諫めて、「御憤りはさることながら、佐殿小勢也といへども、十万の兵あり。今軽々しく押し寄せ給は、味方も多く討たるべし。所詮今夜真夜中に、忍びやかに押し寄せて、短兵急に攻め

○下へ

○上より破らば、佐

殿を手取りにせんこと、袋の物を探るより易かるべし。此義に従ひ給へかし」と、言ふに義仲怒りを収めて、「その謀極めて妙也。さらば夜討ちの用意をせよ」とて、隈なく士卒に触れさせけり。

こ、に又、義仲の従兄弟なりける、長瀬判官義定【項伯】は、斎宮介親良【張良】と、莫逆の友なりければ、今宵夜討ちの陣触れを、聞つ、心に思ふやう、「味方の大軍不意に起こりて、葉上の陣を夜討ちせば、誰か一人も逃るべき。人はともあれ親良は、兄弟にも異ならぬ、我が年ごろの友なるに、必ず彼も討たれなん。さるを知りつ、告げずもあらば、我只友に背く也。秘かに

▲上へ

／＼下より由を告げ知らして、落としやらばや」と思ひしかば、馬引き寄せて只一騎、陣門を出でんとするに、この日の当番、多湖二郎季包【丁公】、出で迎へ声をかけて、「こは長瀬殿夕越えて、何処へとてか出で給ふ」と、問はれて義定おめたる色なく、「我らは浦曲に用事あり。程なく帰り来べき也。終日勤番大義にこそ」と、応へてやがて出でてゆく。この義定は義仲の、親族にて



(4ウ・5才 義定、葉上へ急行する)

ありければ、季包これを疑ふことなく、おめくとして出だしけり。

さる程に義定は、走る駿馬に鞭打ちて、頼朝の本陣なる、葉上を指して急ぐ程に、その日も暮れてすではや、初更の頃になりけり。

○こ、に又斎宮次官親良は、頼朝に従ひて、次へ(4ウ・5才)／葉上の陣にありけるが、この夕暮れに端居して、鴻の水門の方を見るに、にはかに怪しき雲起こりて、殺気いたくたち覆ひ、不祥の兆し現れければ、心の内に驚き恐れて、瞬きもせず眺むる程に、そが中に慶雲といふ、めでたき雲のうち混じりて、味方の助けとなる祥あれば、わづかに心を安んじて、本陣に参りしかば、頼朝招き近付けて、「和殿は昼はこれかれとなく、多かる務めに疲れもあらんを、休足の暇もなく、日暮れてこ、へ

鴻の水門木曾義仲の陣

定(義定)「どうぞ折よく斎宮次官に、会ふて秘か

に告げたいものじやが。

来ぬること、火急の軍議ありもやする」と、問はれて親良、「さん候。先に某、天文を見候ひしに、木曾殿の陣の方に、かやうくの雲起こりて、殺気此方を覆ひたり。こは必ず木曾殿が、大軍をもて押し寄せ来つべき、夜討ちの前表疑ひなし」と、言ふに頼朝驚きて、「義仲三十万騎をもて、今宵にはかに押し寄せなば、我何をもて防ぐべき。逃る、手立てはあらずや」と、問はれて親良うちほう笑み、「凶雲不祥を示すといへども、その内にめ



(5ウ) 親良、雲氣をうかがつ

でたき雲あり。○下へ／○上よりこれによりて考ふるに、いと危うきに似たれども、味方の助けになる者ありて、遂に安きに至るべし」と、言ふに頼朝喜びて、「それは頼もしきこと也かし。さればとて用心せずは、恐らく不覚を取ることあらん。早く備へを設けよ」とて、にはかに士卒に触れさせて、敵の夜討ちを防ぐべき、手配りをなんし給ひける。(5ウ)

良(親良)「怪しき雲のたゞすまひ。思ふに敵より

夜討ちの前表。コリヤかうしてはゐられぬはへ。

(二)

かくて長瀬の義定は、葉上の陣に近付く程に、この時夜回りに出でたりける、和田小太郎義盛「夏侯嬰」、怪しみておし止め、「何者なるぞ」と尋ねしかば、義定やがて馬より下りて、「我らは齋宮介、親良と親しき友也。秘かに告げ知らすべき由あれば、かく夕越えて来つる也。此由伝へ給へ」と言ふ。義盛すなはち義定を、陣所に伴ひ帰り来て、親良に云々と、件の由を告げしかば、親良



(6才 義定、葉上に至る)

秘かに喜びて、「こは必ずめでたき雲の、祥なるべし」と思ひつゝ、呼び入れて対面するに、その人は別人ならず、長瀬判官也ければ、迭に別後の情を述べて、恙なきをぞ祝しける。

その時義定膝を進めて、「木曾殿云々の、憤りあるに
より、今宵次へ(6才)／夜討ちの陣触れあり。かやう
く」と囁き示し、「さる時は逃る、者なく、御辺も必
ず討たれ給はん。いかで早く告げ知らして、落としやら
ばやと思ふにも、人伝にては余所へ漏れて、ことの難義

○【▼三つ引両】申さる、趣を、親良に伝へました。

早速お目にかゝるで□／□ござらう。いざま
づあれへお通りなされ。者ども案内いたすが
よからう。

▼三つ引両は三浦氏の紋。和田氏は三浦氏の支族な
ので、ここでは義盛を示すと思われる。

定(義定)「それは千万大慶至極。しからは御免く
だざりませ。

になりもやせんと、思ひ返しつ只一騎、自らこゝへ來つる也。疾くく他所へ赴きて、命を全うし給へ」と、言葉忙しく囁くにぞ、親良聞て、義定の志を感じ、喜びを述べてさて言ふやう、「我が主君は木曾殿に、ちつとも背き給ふことなし。兵庫の関を固めさせしは、木曾殿を拒むにあらず、只是平家の落人を、止めんとての計らひなりしを、そは恨みある者の、讒言せしにぞあらんずらん。願ふは和殿佐殿に、対面して目の当たり、そのことをしも聞給はゞ、我が言ふ由の偽りならぬを、思ひ合はすることあらん」と、言ふを義定聞あへず、「そは思ひ

もかけぬこと也。某が忍びやかに、この所へ來つる由は、をさく和殿の爲にして、佐殿の爲にあらず。何でふ対面すべけんや」と、言ふを親良押し返して、「佐殿は寛仁大度にして、人を容れ給ふこと、わだつみ【▼大海】に異ならず。一度面を合はし給はゞ、後々の爲よろしかるべし。枉げてこの意に任し給へ」と、わりなく止めて奥に赴き、さて頼朝に申すやう、「年ごろ某が親しき友人、長瀬の判官義定が、木曾殿の陣中より、只一人秘かに

來て、こと云々と告げられたり。これすなはち宵に申し、凶雲の中にめでたき雲あり、味方の助けとなりぬべき、前兆に應じたり。早く対面し給ひて、かやうくに宣へかし」と、機密を囁き申せしかば、頼朝深く喜びて、長瀬に対面し給ひけり。

その時義定は、初めて頼朝を見てけるに、そのさま威あつて猛からず、自ら立ちて義定を、客人の坐におしのはし、「ことの趣は親良より、伝へ聞て驚き入たり。我いづくにぞ義に背きて、自立の企てあるものならん。かく福原に討ち入りて、平家を遠く討ち走らせしは、木曾殿早く平安京へ、押し寄せられし軍威に恐れて、平家は一支えも支え得ず、臆病神に誘はれて、都を落ちしによりて也。されば先に信濃宮の、木曾殿と某に、「早く都に攻め上りて、平家を滅ぼしたらん者、武家の棟梁たるべし」と、定めさせ給ひしに、幸ひにして福原の、都へ我まづ討ち入りて、平家を滅ぼしたりけれども、荒ごなしをせられたる、木曾殿の功莫大なれば、万の事を欲しいまゝに、いさゝかも計らふことなし。これらの由を



(6ウ・7オ 義定、頼朝に對面する)

明日明後日の頃、自ら鴻の水門に赴きて、つぶさに申し解かんと欲す。御辺願はくはまづ此趣を、よろしくとりなし給はるべし。我に二人の娘あり、後來成長したらんには、一人は木曾殿の子息に娶せ、一人は御辺の子息に娶さん。この義も受け引き給ひね」と、懇ろに語らはれて、義定辞むことを得ず、「木曾殿の縁談は、只今こ

定(義定)「思ひがけなき拜顔にて、貴意の趣逐一

承知。折をもつて木曾殿へ、つぶさに○／○

演説いたしませう。

良(親良)「人の口に戸も立てられず。跡形もない

讒言を、お聞入れないやうに、何分よろしく

□／□お取りなし、お膝を抱いても願はにやならぬテ。

朝(頼朝)「かねて渴望いたしたに、よい折からにて大慶至極。已後は親良同様に、隔てなくいたしたい。そこは手遠で話が届かぬ。まづこれへ、お手を取らうか。

に議すべからず。俾がことはともかくも、仰に従ひ
 ▲右の下へ／▲左の上より奉らん」と、即坐に言承け
 してければ、親良すなはち仲人也とて、頼朝の袴の紐
 と、義定の袴の紐を、結び合はし切り取つて、後の証据
 にしたりける。

とかくする程に、夜ははや亥中になりしかば、義定は
 別れを告げて、忙はしく退き出で、件の馬にうち乗り
 て、鴻の水門の本陣へ、只一時に帰らんとて、揉みに揉
 んでぞ急ぎける。(6ウ・7オ)

◆親良、弁慶を語らう

斎宮次官親良は、長瀬義定が帰るを送りて、陣門の
 辺にて立別れ、もとの所へ参りしかば、頼朝は親良が計
 らひを喜びて、「この上はいかにして、よろしからん」
 と議し給ふに、親良声を潜まして、「御心安く思し召さ
 れよ。義定鴻の水門に立帰らば、木曾殿を諫め申して、
 □／□必ず夜討ちを止むべし。さる時は君も亦、かの陣
 に赴きて、自ら過ちなき由を、述べ給はずはかなふべか
 らず。今陣中にあひ従ふ、勇士少なきにあらねども、名

ある武士をこれかれと、多く従へて行かせ給はゞ、木曾
 殿いよく疑ふて、不慮のこともや起こるべからん。さ
 ればとてかの威に恐れず、よく君を守護しまつりて、過
 ちなからしめん者、当陣中にはありとも覚えす。よしや
 その人ありとても、木曾殿その無礼を咎めて、たちまち
 和議の破れとならん。よりてつらく思ひみるに、究竟
 の者こそ候へ。この者をだに召し具し給はゞ、木曾殿の
 威勢を挫きて、和談もいよく整ふべし」と、言ふに頼
 朝領きて、「言はるゝ趣我が意に適へり。そもく和殿
 が勧むる勇士は、もとこれいかなる者ぞや」と、問はれ
 て親良「さし候。そは比叡山なる西塔の、武蔵坊の学侶
 にて、弁慶【樊噲】と呼はるゝ者也。身の丈六尺ゆたか
 にて、万夫不当の勇力あり。重さ七十斤に余りぬる、
 鉄の棒を使ふこと、風車を回すがごとく、柄も四尺刃も
 四尺、合はして八尺の大長刀を、脇挟みつゝ、只一人、夜な
 く五条の橋に出でて、十人斬りをしたりと聞ぬ。か、
 る荒法師に候へば、叡山にも住みわびけん、近ごろ此津
 に旅寝して、築島の辺なる、人の庵室に同宿すと、人伝

に聞たるが、某件の弁慶と、一面の交はりあり。かの荒法師を語らふて、木曾殿に見参の、御供に召し具し給はゞ、彼処の威勢をとり拉ぐ、究竟の者なるべし。たとひ当坐に不礼ありとも、君の御家臣にあらざれば、その科君に及ぶべからず。且出家人の事なれば、木曾殿いたく怒るといふとも、罪するに由なからん。是彼もつて第一の、方人にこそ候はめ」と、こと詳らかに囁き申せば、頼朝喜び斜めならず、「それは▲右の印へ／＼▲左の印より究竟の者也かし。和殿明日朝未明より、その庵へ赴きて、こしらへて見られよ」と、又他事もなく宣ふにぞ、親良重ねて異義に及ばず、受け給はり退きて、その明けの朝兵庫に赴き、弁慶が旅寝する、かの庵室に訪れけり。

されば武蔵坊弁慶は、先に義経【韓信】と約束して、主従の義を結びしより、その訪れを待つ程に、義経の兄にてをせし、前兵衛佐頼朝主、石橋山に義兵を挙げ、木曾義仲と謀じ合はせ、東北にたち分かれて、平家の大軍を討ち靡け、すでにして頼朝は、義仲に先立ちて、

次へ(7ウ・8オ)／福原を攻め破り、平家を西海に漂

はせて、かの地に屯し給ふ由、風聞隠れなかりしかば、「しからんには牛若丸も、かの陣にこそをはすらめ。行きて様子を探るべし」と、思へば叡山をたち出でて、福原の方に赴き、築島の辺なる、相知る庵主に身を寄せて、をさゞ義経の、ありなしを探り尋ねしに、「頼朝の舎弟なる、蒲冠者範頼は、兄の兵衛佐殿に從ひて、すでにかの陣中にあり。牛若丸はまします」と、その由定かに聞えしかば、弁慶深く訝りて、心の内樂しまず、なほも彼処に逗留して、義経の安否を知らんと、思ふ心のやうやく疲れて、庵主の留守に只一人、うたゝ寝をしてありけるに、かねて一面の知る人也ける、齋宮次官親良が、ゆくりなく尋ね来にければ、弁慶これに呼び覚まされ、身を起こしつ、対面す。

その時親良はまづ、その恙なきを祝して、その身のしばらく頼朝に、従ふ由を告げ知らせ、さて義仲の憤りによりて、こと起こらんとせし、趣を囁き示し、「その厄難は逃れしかども、頼朝自ら鴻の水門の、陣所に赴き給はずは、かの疑ひ解けがたからん。しかれ共時に臨みて、



(7ウ・8オ 親良、弁慶を訪れる)

木曾殿の威を犯して、佐殿を守護すべき、究竟の供人なくは、免れ給ひがたかるべし。よりに和僧を雇はん為に、佐殿の使ひとして、某推参したる也。この義を受け引き給ひね」と、又他事もなく頼みしを、弁慶聞て頭をうち

良（親良）「幸ひ刃りに人もなし。密談にはよい折なれど、眠りの妨げ起こすも気の毒。といふて久しく待たれぬ急用。鉄砲のある世なら、一番泉三郎もどきで、○／○どんといはせて見たいものだ。

▼浄瑠璃『義経腰越状』（宝暦四年・一七五四初演）の泉三郎は、酔い臥した五斗兵衛に対して、わざと空鉄砲を撃ち、彼を正気に戻す。

弁（弁慶）「談合をする所の、絵組みが多くなる故に、孔明もどきで寝てゐても、油断はいたさぬ、狸だ〜。

▼『三国演義』の諸葛亮（孔明）は、劉備三度目の訪問の際、昼寝の最中であつた。

振り、「我佐殿によしみもなきに、何の為にさる一大事の、**▲右の印へ**／**▲左の印より**供に雇はれて従ふべき。我は往ぬる頃故ありて、牛若丸と主従の、約束をしたる事あり。しかるに佐殿は今、大軍を従へて、平家を滅ぼし給へども、牛若丸を招き給はず、只範頼主をのみ、いとも親しくものし給ふは、心得がたきこと也かし。蒲殿も牛若も、**○下へ**／**○中より**ともに佐殿の御舎弟なるに、依怙最負をし給ふは、頼もしげなき大将也。誰か雇はれて供に立つべき。思ひもかけぬこと也」と、爪弾きをして辞みけり。

親良これをうち聞て、「和僧の恨みはさることながら、牛若丸の御事は、鞍馬を逐電し給ひてより、その御行方今に知れず。かの人自ら出で来たりて、佐殿に従ひ給はゞ、用ひ給はぬ事やはある。今にもあれ御陣に至りて、共に力を合はせ給はゞ、佐殿喜び給ふべけれ。和僧すでに牛若丸と、主従たらんと約し給はゞ、佐殿の厄難を、余所に見ん事これ不義也。佐殿の供に立ちて、その危うきを安からしめば、只佐殿の為ならず、牛若丸にも忠義

也。この義を思ひ給はずや」と、言葉を尽くして勧めしかば、弁慶心に思ふやう、「此度の頼みに応じて、佐殿の役に立ば、後に至りて牛若の、御為よろしき事もあるべし。そはとまれかくもあれ、人を救ふは**次**へ（8ウ・9オ）／出家の役也。我その供に立つべけれ」と、思案をしつゝ、頷きて、事やうやくに受け引きけり。

◆長瀬義定、義仲を説く

○これより先に義仲は、「葉上の陣を夜討ちにせん」とて、その夜子の頃おひに、士卒に兵糧を使はして、うち発んとせらるゝに、従兄弟なりける長瀬判官義定の見えざりければ、深く心に訝りて、人して尋ねさせけるに、「長瀬殿は夕暮れに、浦曲の方に用事ありとて、只一騎出で給ひしが、いまだ帰り給はず」と、陣門を守りたる、多胡二郎季包が手より聞えしを、義仲聞て「義定は、我に親しき族なれば、返り忠をすべき者にあらず。今宵何らの故ありて、一人陣門を出でたるやらん」と、思ふのみにて知る由なければ、なほ疑ひは解けざりけり。

か、る所に義定は、葉上より帰り来て、その辺に参り



(8ウ・9オ 義定、義仲を説得する)

しかば、義仲近く招き寄せて、「御辺何らの用事ありて、
何処へか行き給ひたる、心得がたく候」と、問はれて義
定ちつとも騒がず、「さん候。某が親しき友に、齋宮次
官親良と呼べる、者、今葉上の陣にあり。今宵彼処を攻

定(義定)「親良を救はんと、思ふによつて彼処へ
赴き、葉上の陣の虚実まで、見届けたるが今宵
の土産。

行(行家)「スリヤ頼朝の陣中にも、□/□諸方の
手配り油断なく、用心堅固に見えたじやの。

鐔(鐔田)「それで力が落ちました。他に仕方はご
ざりませぬか。

仲(義仲)「かくまで用意の整ひしに、諺にいふ寸
善尺魔、残り惜しいことじやなア。

かく(覚明)「謀、漏る、時は、かへつて味方の禍
あり。又折もござりませう。御出陣は●/●
御無用々々々。

へこの所の本文は次に見えたり。

め撃ち給はゞ、誰か一人も逃るゝ者あらん、かの親良も討たるべし。この事不憫に思ふをもて、秘かに葉上に馳せ行きて、由をかの者に告げ知らせ、落とさばやとて彼処に至れり。よりにて親良が言へるを聞しに、佐殿は先立ちて、福原を攻め落としたれども、絶えて自立の企てなし。その故は□／＼□云々」と、具に告げて又言ふやう、「佐殿は大功ありて、いさゝかも野心なし。さるを讒言を受け入れて、故なく討ちも滅ばし給はゞ、人の功を妬むに似て、天が下の人に笑はるべし。よくく賢慮を巡らし給へ」と、言ふを義仲聞あへず、「しかりともすではや、○中へ／＼○上より夜討ちの用意整ふたり。今さら更改すべからず」と、逸るを覚明おし止めて、「今宵の夜討ちは御無用也。謀敵に漏れたり、彼処にも備へあるべし。さるを撃たんはかへつて危うし。御無用々々」と止めしかば、義定答を改めて、「軍師はさしも▲右の下へ／＼▲左の上より某を、二心ある者と思ふて、これらの意見に及べるか。それががしはかの親良を、秘かに憐れみ思ひしのみ。何でふ二張の弓を引ききて、返り忠

をいたすべき。思ひもかけぬことにこそ」と、言ふに覚明あざ笑ひて、「謀は密なるをよしとす。御返り忠をせずといへども、すでにかの輩に、夜討ちの由を告げられたれば、彼処にも備へあるべし。敵に備へのあるを撃たば、いかにして功あらん。今宵の夜討ちはやめ給へ」と、その理をおして止めしかば、義仲「げにも」と思ひ返して、その夜は葉上を討たざりけり。

(9ウ・10オ)

◆親良、鴻の水門に使用する

されば又、齋宮次官親良は、弁慶を語らひすまして、葉上の陣へ帰り来つ、こと云々と頼朝に、具に告げて又言ふやう、「義定歸りて木曾殿を、秘かに諫めたりけるにや、昨夜は夜討ちもあらずなりにき。さればとて捨て置き給はゞ、遂に禍起りやせん。某御使ひとして彼処に赴き、いよく無事を計るべし」と、言ふに頼朝頷きて、「その義まことに肝要なり。疾くく」と急がし給へば、親良衣服を改めて、供人を將て鴻の水門なる、義仲の陣に赴き、取り次ぎの者につきて、こと云々と述



（9ウ・10オ）親良、義仲の陣に赴く

べしかば、義仲かくと伝へ聞て、「その親良めが胆太くも、主の為に使ひに立つとも、いかでか我を欺き得ん。疾くこゝへ引き出だせ。二言と返さば手討ちにして、新身の刀を試すべし」と、息巻き猛く急がしけり。

これにより親良は、義仲に見参して、遥かに平伏したりしを、義仲きつと睨まへて、「やをれ親良、汝が主の

良（親良）「水清ければ魚住まず、人察なれば友あらず。憚りながらソリヤ御邪推。よくも悪しくも一通り、お聞なされた上のこと、御存分になりませう。

巴「あんまりたほが少ない故、お刀持ちの役不足も、言はずに黙つてゐるはいな。

仲（義仲）「使ひ呼ばり鬼との戯れ。瘦せ領叩かば手は見せぬぞ。

かく（覚明）「三寸不爛の舌をもて、言ひくろむる共いつかないかな、此覚明は△△△飲み込まぬ。

我が君、お聞なされまするな。

頼朝は、我が陰によりて福原を、攻め落とせしに心驕りて、すでに自立の企てあり。この故に我が大軍、日ならず葉上へ押し寄せて、踏み潰さんと思ひをるに、自らこへ来る事もなく、使者もて言はする緩怠無礼、野心はすでに表はれたり。者ども早く其奴めを、我が目先へ引き据えよ、手討ちにせんず」と息巻きしを、親良恐る、気色もなく、「賢君しばらく怒りを収めて、申す由を聞給へ。佐殿は先立ちて、福原に入り給へども、自ら功に



(10) 覚明、義仲に意見する

誇る事なく、をさく君を待ち参らせて、事を議せんとし給ふをもて、よろづ穩便にして、私の計らひなし。先にちとの兵をもて、兵庫の関を攻めさせしは、平家の落人を一人も、東へ出ださじとの為にして、君を拒まん為にあらず。さるをそらに疑ひて、誓ひを忘れ義に背き、友戦をし給はゞ、世の英雄に笑はるべし。佐殿も遠からず、御陣に参入して勝ち戦の、歎びを述べんと欲す。よりてまづ某をもて、貴意を得んとて遣はされしに、故なく誼みを破り給はゞ、是非の及ぶ所にあらず。賢慮いか

へ覚明再び義仲を諫むるところ。此本文は三の巻に見えたり。

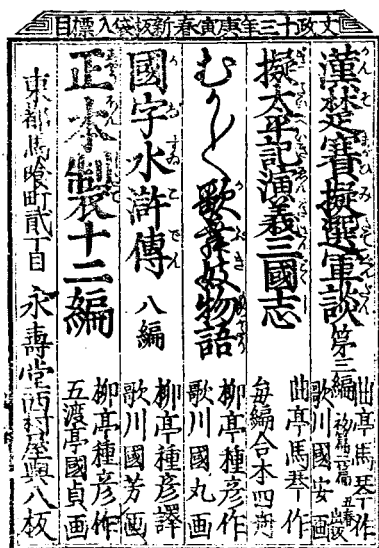
仲(義仲)「いはれを聞けばそこもあらふ。シテ謀はどうじゃ〜。

かく(覚明)「武勇は敵する者もなく、古今独歩にましませども、憚りながら◆／＼御心が、正直すぎて弁舌に、迷はされ給ふことあり。心憎きは佐殿なり、必ず御油断なされますな。

に」と憚る色なく、言爽やかに述べしかば、義仲これに心解けて、「申す趣相違なくは、佐殿自ら来臨あるべし。よくこの由を伝へよ」とて、そがま、親良を帰しけり。

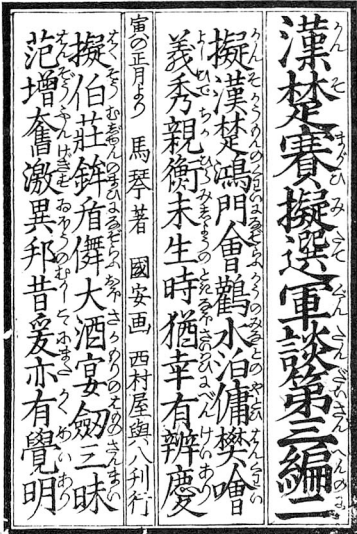
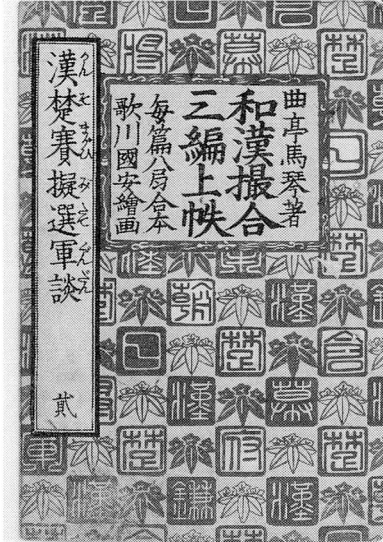
(10ウ)

《第一冊 後表紙封面》



▼奥目録「文政十三年庚寅春新板袋入標目」。天理圖書館蔵の一本(91364 2079)が、右の目録をこの位置に置く。底本ならびに林美一氏旧蔵本は、改装のためにこの目録を欠く。所掲図は、架蔵の『千代楮良著聞集』(改装本)に混入したもの。この目録の改刻に関しては、佐藤悟氏「馬琴の潤筆料と板元—合巻と読本—」(近世文芸59。平成6年)に言及される。

▼後表紙は煉瓦色。



(前表紙)

曲亭馬琴著

和漢撮合／三編上帙

每篇八卷合本

歌川国安絵画

漢楚賽擬選軍談

貳

(見返し)

漢楚賽擬選軍談第三編 一

擬漢楚鴻門會

鶴水泊備樊噲

義秀親衡未生時

猶幸有辨慶

寅の春より 馬琴著

国安画 西村屋与八刊行

擬伯莊鉞盾儼

大酒宴劍三昧

范增奮激異邦昔

爰亦有覺明

◆覚明、義仲に謀を授ける

義仲は思はずも、親良に説き諭されて、覚明が諫めを用ひず、そがまゝ、帰し遣はしければ、覚明又、義仲を諫むるやう、「佐殿は後々まで、下風に立つべき者にあらず。今その勢ひ盛りならざる、時を失はずして滅ぼし給へ。古の諺にも、二葉にして摘まざれば、つひに斧を用ふといはずや。某、今三ツの謀あり、その一つは、勝ち戦の寿きと、称へてかの人を招き寄せ、君自ら対面して、彼が福原を攻め取りしより、何ごとも擅に、執り行ふ由を責めて、即坐に應ふること能はずは、一刀に斬り殺し給へ。これ第一の謀也。又一つ、君もしかの人に云々と、宣ふことの厭はしくは、数多の力士を幕の内に隠し置き、彼がこゝへ来つる時、討ち取らし給へかし。是第二の謀也。この義も亦、御心に適はずは、酒宴の席にて佐殿に、酒を強いて盛り潰し、その無礼あらん時、君いたく罵り咎めて、やにはに討ち果たし給へ。彼もしいたく酔はずして、無礼の振る舞ひあらずとも、某折を見計らひ、腰に帯びたる印籠の、緒締めを鳴らして合図

とせん。その折佐殿を討ち取り給へ。これ第三の謀也。この三つの謀、いづれなりとも選ませ給ひて、行はせ給ひね」と、言ふを義仲うち聞て、「その謀次へ（11才）／いづれもよし、全て我が心に適へり。いづれまれ折に臨みて、必ず執り行なひてん。まづ頼朝を招き寄する、手立てこそ肝要なれ」とて、手づから書簡を認めて、使ひを葉上の陣に遣はし、「平家悉く没落したる、勝ち戦の寿きに、諸大将を相集へて、歎びの酒宴を設け、共に陣中の徒然を慰めんと、欲すること○上の印へ／○しきりなり。願ふは明日巳の頃より、鴻の水門へ来会し給へ。待ち奉る」と書れたり。

かくてその使ひ葉上に至りて、件の書簡を参らせしかば、頼朝開き見て心安からず、やがて親良にもその書を見せて、「吉凶いかゞあるべし」と、問ひ給ふに親良答へて、「明日の集会は、凶多くして吉少なし。さりとて行かせ給はずは、木曾殿怒りて押し寄せ来つべし。某不肖には候へ共、君に従ひ奉りて、鴻水門の陣に赴き、机

【▼「機」の略字】に臨み変に應じて、覚明に謀を、行

ふことを得ざらしめん。御心安く返りかへごとを、遣はし給へ」と勧めしかば、頼朝この議に従ふて、参るべき由の、受け文うけぶんを認めて、使ひを帰し給ひけり。

その時親良又言ふやう、「明日の御供人、大勢にては疑はれて、かへつて事の難義にならん。か、れば屈強の、士卒百人を具し給へ。かの弁慶をもかねてより、雇ひ置き候へば、今より某それ、かの法師の旅宿に赴きて、明日のことを、告げて誘ひ候はん」と、言ふに頼朝領きて、



（11）才 士卒ら、頼朝の来訪を窺う

「とにもかくにも汝に任せん。思ひのま、に計らひてよ」と、他事なく応へ給ひしかば、親良は忙はしく、外の方さして出でにけり。

◆鴻の水門の会

かくてその次の日の朝より、義仲の陣中には、覚明秘かに手配りして、用意悉く整ひければ、「佐殿遅し」と待つ程に、思ふにも似ず頼朝は、手勢わづかに百人ばかり、結城七郎朝光、真田与二紀信【紀信】らを、馬の左右に立したる、その後方には武蔵坊弁慶も従ひけり。

すでにして頼朝は、鴻の水門の陣門へ、はや近付きて見給ふに、鎧ふたる武者幾人ともなく、弓矢を携へ、鉦長刀を突き立てて、前後の木戸を固めたる、勢ひたゞな

力士「合図を聞外してやり損なつては、株仕舞だに

ヨ。

同「承知さく。ちよつと覗いて見てくんねへ。

力士「あれくあしこへ大頭が、来るぜく。

▼欄上に「(三)」とあるべきところ。

らぬありさまなれば、心いよく安からず、しばらくそこに馬を止めて、まづ親良を遣はして、参着の由を告げしめ給へば、義仲やがて親良を、ほとり近く呼び入れて、怒れる声をふり起こし、「汝らが主の頼朝は、我が陰によりて福原を、攻め落とせしより心驕りて、思ひのまゝに執り行なひ、あまつさへ関を

▲右の下へ / ▲左の上

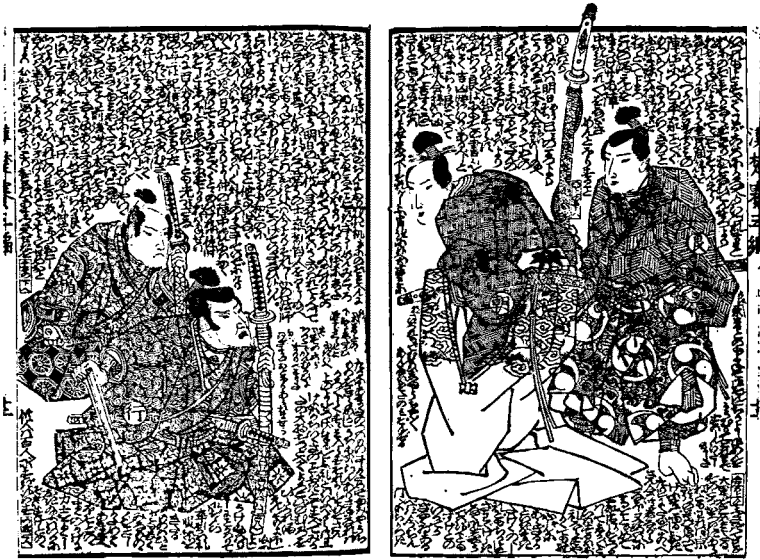
より塞ぎて、我が大軍を拒みたる、その科軽きにあらねども、我同宗の義を思ふて、今日まで許しおきたりしに、たましくこゝへ参会しながら、なほ又路次に馬を止めて、家臣を遣はして云々と、言はするは無礼ならずや。かくても野心にあらざるか」と、息巻き猛く罵れども、親良騒ぐ気色なく、「御説では候へども、佐殿いかでか逆意あるべき。今陣門に近付きたるに、数多の兵鎖し固めて、弓矢打ち物をきらめかし、撃ちもかゝらんありさまなれば、軽々しく進み入らず、某をもて参上の、由を告げ奉るを、無礼とはいふべからず。且今日は、勝ち戦の寿きとて、全て味方の大将を集へて、歡びの筵を開かれ、酒宴を催し給ふ由、受け給はりしにこと変はりて、御陣

の「士」脱力」卒は礼服を、着たる者は一人もなく、皆物の具をさし固めて、あまさへ廊の幕の陰に、力士を隠し置き給ふはいかにぞや。佐殿の供人は、百人に過ぎ候はず。

次へ(11ウ・12オ) / 討ち取らんと思し召さば、かくまで用意し給はずとも、容易かるべきことなるに、日ごろの武勇に似げもなき、おん計らひに候はずや」と、憚る気色もなく申し、かは、義仲たちまち心に恥じて、隠し置きたる力士らを、悉く追ひ退け、「皆礼服に改めよ」とて、十郎藏人行家と、楯六郎親忠を遣はして、頼朝を迎へけり。

その時親良は、もとの所に走り歸りて、頼朝に由を告げ、「木曾殿只今対面して、云々と宣はゞ、かやうく」に答へ給へ」と、忙はしく囁き示して、引て陣門に進み入るに、こゝを守る二人の大将、手塚太郎光盛「丁公」、倉光三郎兼光「雍齒」ら、忙はしく出で迎へ、「木曾殿の下知也」とて、頼朝・親良主従の、他は一人も門内へ、入ることを許さず、早くも木戸を引閉てさせて、門をさへ下ろせしかば、結城七郎・真田与次ら、主君

(11ウ・12オ 行家・親忠、頼朝を出迎える)



の命に代はらんと思ふ、供人らはその甲斐なきを、いと口惜しく思ひけり。

かくて行家・親忠らは、頼朝に導いて、客の間に誘ふ程に、義仲たち出でて、頼朝にうち向かひ、「御辺此度、福原を攻め落とせし、その功なきにあらねども、我が三十万騎をもて、早く都に討ち入らずは、御辺いかでか先潜りして、たやすく勝つ事を得べけんや。か、ればその元功は我にあり。しかるに御辺は逆意を企て、兵庫の関を固めて我を拒み、あまさへ福原の民を手懐けて、三箇条の法度を定め、平家の財宝を掠め取つて、義仲を滅ば

良(親良)「木曾殿もかねて御存知、親良御免を蒙りて、これまで隨身いたしました。

朝(頼朝)「いづれも出迎ひ祝着々々。案内を頼み存ずる。

行(行家)「木曾殿の下知に従ひ、源十郎藏人行家、楯「楯」六郎親忠、御迎ひにまかり出ました。

兩人「いざまづお通りあられませう。

さんとす。その陰謀隠れなし。かくても今さら言ひ訳あるや。いかにいかに」と息巻きたり。

その時頼朝面正して、「こは思ひがけもなき、疑ひを受け候ものかな。兵庫の関を固めさせしは、和君を支えんためにあらず、只かの平家の落人らを、都の方へ走らせじと、思ひしによつて也。又福原なる故老の民と、三ヶ条の法を△右の下へ／△左の上より約せしは、これも又某が、擲にせしにはあらず。平家の悪しき政に、年ごろ苦しみたる民どもなるに、一日その悪政を、改めずは民に又、一日の苦しみあり。こゝをもて、早く法度をゆたかにして、民の心を安からしめしは、これと和君の武徳の程を、世に知らしめん為にして、我が私の計らひならず。又平家の財宝は、みな塗り籠めにあるまゝに、封じて一つもこれを取らず。只御指図を待ちたるのみ。某野心あらんには、招かるゝとも来べからず。供人わづかに召し具して、参れるこそ野心なき、証拠には候はずや」と、おめたる気色もなく答へ給ひけり。

義仲は心猛く、武道に優れし大将なれども、心ざま素

直にして、もとよりその思慮◆／◆足らざりければ、今頼朝に説き諭されて、「さもあるべし」と思ひしかば、からからとうち笑ひ、「御辺の言ひ訳道理に適へり。我らも左あらんと思ひしに、御辺に従ふ内間田幸弥が、云々と内通して、逆意の由を告げしかば、事のこゝに及べる也。さらば杯を勧めなん。しばらく休足し給へ」と、又他事もなくうち解けて、○左へ／○右よりそがま、奥に退きけり。

○さる程に客も主も、各々衣服を更めて、設けの席に着きしかば、これより酒宴はじまりて、そのもてなしこまやか也。

かゝりしかば覚明は、先に義仲に勧めたる、第一・第二の、謀行はれねば、心頻りに苛立ちて、腰に帯びたる印籠の、縮縮を鳴らして合図としつゝ、義仲に目を配すれども、義仲これを見返ることなく、頻りに笑ひ樂しみて、頼朝を害せんと、思ふ心のあらざりければ、覚明いよく氣を揉みて、「この上は佐殿に、酒を強ひて次へ(12ウ・13オ)／いたく酔はせ、その無礼あるを咎めて、



(127・13才 義仲、頼朝を饗応する)

殺すにしかじ」と思案をしつ、給侍に立ちたる近習の侍、秩父の二郎重忠、梶原平三景時ら【▼原作では陳平一人】に、謀を囁き示して、盛り潰さんとぞ目論みける。

されば重忠・景時は、はじめ義仲の、北国に起こりし時、その催促に従ひて、義仲に仕へしかば、此陣中にあるものから、秘かに頼朝の徳を慕ふて、いかでと思ふ心あり。この故に、頼朝に酒を盛るときは、斟酌して多く注がず。又義仲にはその度ごとに、溢る、までに盛りたりければ、頼朝は後々まで、ちつとも酔ひたる気色なし。

～此所、大諸侯の参会なれば、酒宴の左右より席といへども雑談せず。よりていづれも詞書なし。

- ～景時 ～長瀬の義定 ～越後の忠太
- ～根井大弥太 ～淡路の冠者
- ～二川左衛門よりむね ～樋口の二郎
- ～今井四郎 ～難波小四郎 ～妹尾太郎
- ～行家 ～重忠 ～覚明

すでにして覚明は、頼朝を討たんと思ふ、手立て空しくなりしかば、休えかねて折を見合はせ、次の間に退くに、越後中太能景「項莊」のゐたりしを、招き寄せて囁くやう、「和殿は何と思ふやらん、今日頼朝を討ち取らずは、後悔こゝに立ちがたし。しかるに我が君は、かの主従に説き迷はされて、我が謀に従ひ給はず。和殿早く彼処へ参りて、かやうく計らへかし」と、言ふに能景心得て、酒宴の席に赴きて、義仲に申すやう、「古より兩國主、共に好を通ずる時は、必ず舞樂を奏する事あり。しかれ共、今陣中の事なれば、楽人の用意なし。いかで御許しを蒙りて、劍の舞も御酒宴の、興を添えばや」と申すにぞ、義仲聞てうち領き、「しかるべし」と許せしかば、能景帯びたる刀を抜きて、立ちて席上に舞ひにけり。底意は舞にこと寄せて、頼朝を討たんとす。長瀬判官「項伯」これを見て、心の中にいたく驚き、「こは必ず頼朝の、討たれ給はん」と思ひしかば、又義仲に申すやう、「舞は一人なるべからず。某も亦能景と共に舞ひ候はん」と、言ひつゝ、やがて身を起こし、腰刀

を抜き持ちつゝ、拍子を揃へて○右の中へ／＼左の上より舞ふたりける。されば越後の能景が、頼朝を討たんとすれば、義定やがておし隔てて、遮り止むる事しばく也。かくても頼朝の危うきこと、鳥の子を重ねしごとく逃れ果つべくも見えざりければ、▲下へ／＼▲中より親良秘かに立退きて、走りて陣門を出でんとするを、門守の二人の大将、手塚太郎・倉光三郎、忙はしく遮り止めて、「こは何方へ出づるぞや」と、問はれて親良ちつとも騒がず、「某は今、木曾殿の仰によつて、門外へ立出でて、勘合の印をもて来るもの也。開きて通し給ひね」と、言ふをも聞かずがやくと、しきりに止めてやまざりけり。

この時秩父重忠「陳平」は、親良の後につきて、端近く出でたるが、かねて頼朝に従はんと、思ふ下心のあるにより、早く親良の心を推して、忽ちに□左へ／＼□右より声をかけ、「人々齋宮介を出だし給へ。我が君の仰なるぞ」と、高やかに呼ばはりけり。「すでに味方の重忠が、かく言ふなれば障りなし」とて、そがま、親良を出だしけり。



(13ウ・14オ 親良、陣門を出でんとする)

その時親良は、弁慶を招き寄せて、頼朝のいとも危う

き事の、為て体たうを次へ (13ウ・14オ) / 囁ささき示し、「かね

て和僧を雇ひしは、かゝる折の為ぞかし。速やかに内へ

入りて、守護してたべ」と頼みつゝ、又門内へ進み入る

重(重忠)「手間暇ひま入らば後日の咎め。苦しうない、

通したく。

良(親良)「木曾殿とろの仰にて、勘合の印いんを持参の為、

御門外へ罷り出ます。▲／▲お通しなされく。

手塚てづか(手塚九郎)「たとへ御意でもその筋より、

くらく(倉光三郎)「ことわりなくては叶ひませぬぞ。

雑兵

(左下。門外)

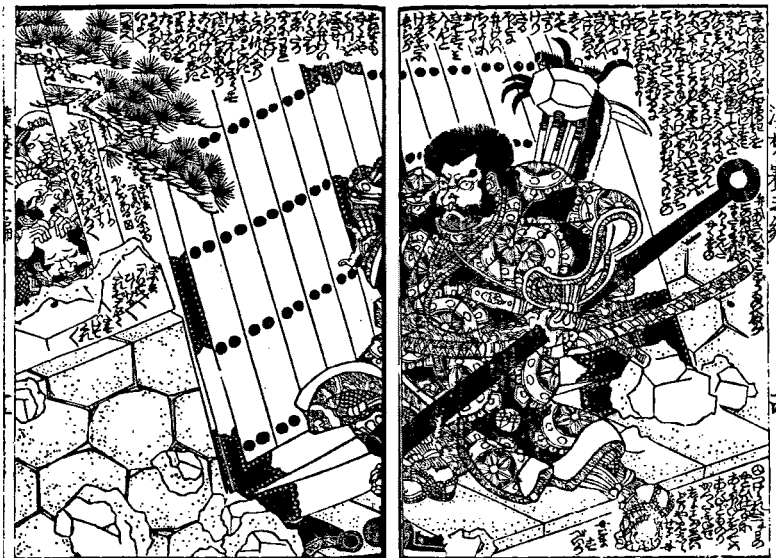
光あき(へ結城の朝光)「心にかゝるは主君の安否。

皆々みな「漢わんの王陵おうりやう・紀信きしんにも、劣らぬ□／□勇士も

せん方の、ながき「▼「ない」と「長き」

一日いちにちのもの思ひ。

紀のり(へ真田まのた紀信)「ハテ何としたらよからふなア。



(14ウ・15オ 弁慶、門を破らんとする)

に、手塚・倉光ら声をかけて、「いかにかの勘合の、印を取りもて来たれりや」と、問へば親良袂に手をかけて、「印はすなはちこゝにあり」と、答へて奥に赴きて、もとの所に坐を占むるに、この時までも能景と、義定が劍の舞は、たけなはにして果てざりけり。

さる程に弁慶は、親良におし続きて、進み入らんとし、てけるを、雑兵らが隙間もなく、早くも門を鎖せしかば、

弁（弁慶）「朝比奈だともういへぬが、この時代

にはまだ生まれぬから、飛んだ役を○／○付けられた。一日の雇ひ仕事に、粗骨折つては合はねども、乗りかゝつた船でしよことがない。どりや見知らせて●／●こますべいか。

雑兵「強いといふも程がある。□／□天狗倒しか山嵐が、たゞし地震の申し子か。どういふもんだ、逃げるく。

雑兵「ア痛へく拉げるく。誰ぞ早く助けてくれく。

弁慶奇立ち声高やかに、「我らは佐殿の供人なり。木曾殿に見参して、申すべき一義あり。こゝあけ給へ」と呼ばりて、しきりに門を叩けども、内にはいよいよ「次へ(14ウ・15オ)／＼厳しく鎖し固めて、応ふる者もなかりしかば、弁慶ますく／＼奇立ちて、「かくまで言ふに応へもせぬは、皆々耳のしいたるか。その義ならば押し破つて、いで通らんず止めて見よ」と、ほざきほざきて、いで通らんず止めて見よ」と、ほざきほざきて、鉄の、棒を左手に脇挟み、右手の袖を巻き上げて、陣門に片手をかけ、「ゑいや／＼」と押す程に、わたり二尺に余りたる、門の柱のゆらめきつゝ、たちまち甍を揺り落とし、さしも固めし大門を、たちまちだうと押し倒せば、鬨の際に集ひたる、雑兵数多圧に打たれて、生死も知らず悶着す。

弁慶それには目もかけず、遮り止むる雑兵を、うち倒し叩き伏せて、人なき境に入ることく、つひに酒宴の席に至りて、縁側にかけて渡したる、幕おし上げて睨まへたる、気色只ならず見えしかば、義仲驚き訝りて、「あの荒法師は何処の者ぞ」と、問はれて頼朝膝おし進め、

「彼は比叡山の客僧にて、武蔵坊弁慶と、呼ばるゝ者に候」と、言ふに義仲頷きて、「げに遅しき法師なり。何の求むる事ありて、こゝへ推参したるぞや」と、再び問はれて弁慶は、義仲をきと睨まへて、「某、旅寝の徒然に、佐殿の供に立ちて、久しく陣門の彼方にあり。今日は平家を討ち滅ぼしたる、勝ち戦の寿きとて、酒宴を催し給へども、我々には一滴の、したみ酒だも給はらず、あまざへ百人に足らぬ四へ続(15ウ)

▼十五丁裏の画面は、十六丁表と一連なので、次回の冒頭に掲出する。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)